

[論 文]

友人関係における対人認知と好意の変化 —友人関係ルールとの関連—

Changing Processes of Interpersonal Perception and Attraction:
Analysis from the Rules of Friendship

吉 山 尚 裕
Yoshiyama Naohiro

Abstract

The purpose of these studies was to examine the changing processes of interpersonal perception and attraction from the point of friendship rules. Study 1 found twenty-five important friendship rules among female college students. Study 2 investigated longitudinal changes on the rules of friendship, interpersonal perception and attraction toward an intimate friend of each first year female college student. Results showed the following: (1) interpersonal perception and attraction were correlated with the degree of keeping friendship rules; (2) increase of keeping friendship rules led to positive changes of impression and attraction toward a friend, but decrease of keeping friendship rules led to negative changes of impression and attraction toward a friend within three months; (3) the amount of negative changes of impression and attraction was larger than the amount of positive changes. It was suggested that friendship rules play an important role in social interaction between close friends.

Key words: rules of friendship, interpersonal perception and attraction.

問 題

本研究の目的は、短期大学の新生女子を対象にして、友人関係ルールを順守することが、友人に対する印象（対人認知）や好意（対人魅力）とどのような関連があるのかを検討することである。

友人関係をはじめ、対人関係の成立過程では、出会いの段階から対人認知が重要となる。なぜなら、相手をどのように認知するかによって、その後の相互作用の質や量が決定されていくからである。また、相手との相互作用が続くにつれて、相手に対する好意的もしくは非好意的態度、すなわち、対人魅力が形成される。自分と相手が互いに好意を抱くことは、両者の満足感や充足感につながるし、適応的な意味でも重要である。

従来、対人認知や対人魅力に関する研究は、一時的または限定的な対人接触場面を実験

的に設定して、認知や魅力の規定因を明らかにしようとする研究が多かった。しかし近年では、調査的な手法を用いて、現実の対人関係がどのように親密な関係へと発展していくのかが研究されるようになってきた (e.g., Berg, 1984; 山中, 1994)。そうした対人関係の親密化に関する研究において、出会った友人に対する認知や好意の変化は、関係発展のプロセスを探る重要な手がかりになる。

廣岡・山中 (1997) は、大学の新生女子を対象にして、彼女たちが入学して出会った同性他者の印象を8ヶ月間、5時点にわたって追跡調査を行った。その結果、「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」「活動性(力本性)」という対人認知の基本構造そのものは、きわめて安定していることを報告している。また、山中 (1994) は、同じく大学の新生を対象にして、入学式の1週間後、2週間後、4週間後、2ヶ月半後に友人間で交わされる行動や関係の親密さ(好意度や関与度など)について調査を行った。その結果、2ヶ月半後の親密さのレベルが、入学して2週間後という出会いの初期に決定されることを確認している(初期分化現象)。

これらの研究は、新生の友人関係が、入学直後の短期間に成立し、それが比較的長期にわたって続くことや、友人に対する認知や好意度が安定していることを示している。しかし、例えば、喧嘩やめめ事のように、相互作用に何らかの変化が生じることによって、友人に対する印象や好意度が変化していく可能性もある。本研究では、対人認知や好意度に変化をもたらす相互作用要因として、「人間関係ルール」に注目した。

Argyle, Henderson, & Furnham (1985) によれば、人間関係ルールとは、多くの人々が、「すべきである」または「すべきでない」と考えていたり信じている行動である。そして人間関係ルールには、2つの重要な機能があるとされる。一つは、関係を維持するために、葛藤や争いを最小限に留めるように行動を規制する働きである。もう一つは、関係を発展させるために、援助や協力、愛情や信頼といった心理的報酬の交換を促す働きである。

そうした人間関係ルールの一つが、「友人関係ルール」である。Argyle & Henderson (1984) は、予備調査を通して作成した43個の友人関係ルールについて、18~25歳と30~60歳の2つの年齢層の男女60名に重要度評定(9段階)を求めた。その結果、重要とされたルールは、自発的な援助、プライバシーの尊重、秘密を守ること、信頼すること、お互いの友人を受け入れること、よい知らせを共有すること、などであった。逆に、重要とされなかったルールは、自己呈示や服従、定期的な会合、金銭上の話し合い、悪口を言うこと、などであった。本邦では、藤田 (1997) や畠山 (2001, 2003) が、大学生を対象にして友人関係ルールの抽出を試みている。しかし、友人関係ルールを守る程度(順守度)が、友人に対する印象や好意度とどのように関連しているのかについては、検討されていない。

そこで本研究では、「友人関係ルールの順守度」と「友人に対する認知・好意度」との関連を明らかにする。研究1では、短期大学生女子を対象にして友人関係ルールの抽出を行う。次いで研究2では、入学後にできた友人とのルール順守度の変化に伴い、友人に対する認知や好意度がどのように変化していくかを縦断的調査を通して検討する。

研究 1

目的

友人関係ルールの抽出を目的とする。具体的には、友人関係ルールの項目リストを作成し、どのような友人関係ルールが重要なのかを明らかにする。

方法

＜調査対象者＞短期大学2年生女子146人（平均年齢19.1歳）。調査時期は、2000年の4月下旬であった。調査は、「社会心理学」と「組織コミュニケーション論」の授業で実施された。

＜調査票＞Argyle & Henderson (1984, 1985) と藤田 (1997) を参考にして、友人関係ルール70項目を作成した（表1参照）。調査では、「本学に入学してから知り合った、最も親しい同性の友人を1人」（Aさんとする）を思い浮かべてもらい、「Aさんと自分との人間関係にとって、それぞれの項目がどのくらい重要か」を「非常に重要だ＝5」～「重要ではない＝1」で5段階評定してもらった。併せて、Aさんと知り合った時期や親しさ、好感度についても質問した。

結果と考察

1. 友人との関係性

調査対象者に友人Aさんと知り合った時期について、「入学して1ヶ月以内」「入学して1ヶ月後～夏休みの開始前」「夏休み中～前期の終わり」「後期の開始～冬休みの開始前」「冬休み中～後期の終わり」「春休み中～現在」の6つの中から、1つ選択してもらった。その結果、「入学して1ヶ月以内」を選択した者が123名（84%）に達し、回答した2年生の8割以上が、入学後1ヶ月以内に知り合った相手と友人関係を継続していた。

次いで、友人Aさんとの親しさを5段階評定してもらったところ、「非常に親しみを感じている＝5」が74名（51%）、「かなり親しみを感じている＝4」が59名（40%）で合わせて9割に達した。好感度も、「非常に好感を持っている＝5」が81名（56%）、「かなり好感を持っている＝4」が59名（34%）で9割に達した。したがって、以下に報告する「友人関係ルール」の重要度評定は、入学して1年以上続いている親しい間柄の中で得られた結果であると言える。

2. 友人関係ルールの抽出

表1には、友人関係ルールの重要度評定の平均値を示している（重要度順）。多くの学生たちが重要だと考えている上位25項目（平均値3.8以上）を、人間関係ルールのもつ2つの機能から整理してみよう。

まず、友人関係を維持するために行動を規制するルールとしては、「1. 借りたお金は必ず返す」「7. 借りた物は必ず返す」「13. 秘密は必ず守る」「6. 約束したことは、必ず守る」「53. プライバシーを尊重する」「31. 建て前でなく本音で話す」「11. うそをつかない」「60. 人格を傷つけるようなことを言わない」「34. 時間を守る」「15. ケンカをしたら謝る」「40. 過剰に気を使わない」「48. お互いに対等の立場で付き合う」「41. 他の友人との付き合いを制限しない」「28. 自分の友人を批判しない」「44. 趣味を押しつけない」の15項目があてはまるだろう。

他方、友人関係を発展させるために、心理的報酬の交換を促進するルールとしては、「4. 助けたり、協力し合う」「26. 落ち込んでいるときに支える」「23. 相談にのる」「25. お互いに信頼しあう」「12. 必要な情報を知らせる」「42. 会話を楽しくする」「70. 偶然会ったら、声をかける」「22. 良い知らせを伝える」「43. 自分の気持ちを打ち明ける」「54. 困ったことがあれば知らせる」の10項目があてはまるだろう。

以上の結果に基づき、調査2を行う。調査2では、重要度評定が高かった友人関係ルール上位25項目を使用し、自分と友人のルール順守度を捉える。

表1 友人関係ルールに関する重要度評定の結果 (70項目)

項 目	平均	<i>S D</i>	人数
1. 借りたお金は必ず返すこと	4.70	0.60	146
7. 借りた物は必ず返すこと	4.66	0.59	146
13. 秘密は必ず守ること	4.61	0.65	146
4. 助けたり、協力し合うこと	4.43	0.77	146
26. 落ち込んでいるときに支えること	4.43	0.65	146
23. 相談にのること	4.41	0.64	146
6. 約束したことは、必ず守ること	4.40	0.78	146
25. お互いに信頼しあうこと	4.38	0.71	146
53. プライバシーを尊重すること	4.30	0.80	146
12. 必要な情報を知らせること	4.30	0.82	146
31. 建て前でなく、本音で話すこと	4.18	0.87	146
11. うそをつかないこと	4.16	0.92	146
42. 会話を楽しくすること	4.14	0.90	146
60. 人格を傷つけるようなことを言わないこと	4.13	0.87	146
34. 時間を守ること	4.09	0.93	146
15. ケンカをしたら謝ること	4.08	0.91	146
40. 過剰に気を使わないこと	4.04	0.86	145
48. お互いに対等の立場で付き合うこと	4.02	0.93	146
41. 他の友人との付き合いを制限しないこと	4.01	1.04	146
70. 偶然会ったら、声をかけること	4.01	0.92	145
22. 良い知らせを伝えること	3.94	0.87	146
43. 自分の気持ちを打ち明けること	3.93	0.91	146
28. 自分の友人を批判しないこと	3.86	0.97	146
54. 困ったことがあれば知らせること	3.83	0.90	146
44. 趣味を押しつけないこと	3.80	1.04	146
37. 自分の意見を押しつけないこと	3.77	0.90	146
51. 共通の話題を見つけて話をする	3.65	1.05	146
45. 話に積極的に関心を示すこと	3.64	0.94	146
16. 自分の悪口を他人に言わないこと	3.63	0.97	145

項 目	平均	<i>S D</i>	人数
21. 話をしているとき、関心を示すこと	3.62	0.81	146
59. 困ったことを打ち明けること	3.62	0.94	146
29. 人前で自分の悪口を言わないこと	3.61	0.99	146
9. 過度に干渉しないこと	3.60	0.81	146
38. お互いに友人を受け入れること	3.59	0.97	146
8. 将来について話すこと	3.56	0.92	146
52. お互いに近況報告し合うこと	3.55	1.02	146
14. お互いの友達と仲良くすること	3.55	1.01	146
30. 頼まなくても助けること	3.54	0.87	146
18. 冗談を言うこと	3.50	1.06	145
33. 長所をほめること	3.45	1.02	146
27. 自分的人际関係に嫉妬しないこと	3.45	0.97	146
24. 相手を楽しませるように努力すること	3.42	0.95	146
46. 家に来るときは連絡してから来ること	3.41	1.21	145
55. 短所をけなさないこと	3.40	1.10	146
19. 自分がないとき、自分を弁護してくれること	3.32	0.88	146
56. 異性（恋人やBF）の話をしつこく聞かないこと	3.29	1.01	146
2. 何かにつけ連絡を取り合うこと	3.28	0.96	146
62. 話に乗って盛り上げること	3.27	1.00	146
50. 異性（恋人やBF）の話をすること	3.26	1.11	146
69. 頼み事を引き受けること	3.13	0.86	146
5. 長期休暇時に連絡を取り合うこと	3.03	0.94	146
63. 話している時は黙って聞くこと	2.98	0.99	146
49. 一緒に昼食をとること	2.93	1.15	146
58. 遊びに行く時は誘うこと	2.91	0.96	146
32. 定期的に一緒に遊ぶこと	2.88	0.98	146
67. 家族の話をすること	2.84	0.93	146
35. お互いに友人を紹介しあうこと	2.73	0.90	146
3. 一緒に講義に出ること	2.73	1.01	146
20. 小言を言わないこと	2.70	0.87	145
57. 頻繁に連絡を取り合うこと	2.70	0.90	146
17. 説教しないこと	2.52	0.94	146
64. 下品な話題は避けること	2.39	0.93	146
10. プレゼントを交換すること	2.31	0.96	146
47. 電話は交代でかけること	2.26	0.97	145
61. どちらが話し役で、聞き役か決まっていること	2.20	0.84	146
65. 暗い話題や硬い話題は避けること	2.14	0.88	146

項 目	平均	S D	人数
66. 学校の成績の話をしないうこと	2.11	0.85	146
68. 自分の気持ちを打ち明けないうこと	2.07	0.83	146
39. 他人の悪口を一緒に言うこと	1.90	0.95	146
36. 一緒にバイトに行くこと	1.77	0.83	146

注：5＝非常に重要だ、4＝かなり重要だ、3＝どちらともいえない
2＝あまり重要ではない、1＝重要ではない

研究 2

目 的

「友人関係ルールの順守度（の変化）」が、「友人に対する認知や好意度（の変化）」とどのように関連しているかを検討する。友人関係ルールは、「自分がどのくらい守っているか」と同様に、「相手がどのくらい守っているか」も重要であろう。そこで、ルールの順守度については、この2つの観点から質問した。

方 法

<調査対象者>短期大学1年生女子に2回の調査を実施した。1回目は、2000年6月初旬に実施し、170人が回答した。2回目は夏休み明けの9月中旬に実施し、165人が回答した。調査は、「心理学概論」の授業（2クラス）で実施された。実施にあたっては、調査目的と継続調査の必要性を説明し、学籍番号の記入を依頼した。これら2回の調査に回答し（151人）、想起してもらった友人のイニシャルが6月と9月で一致した者は120人であった。うち欠損値の多い2人のデータを除き、118人のデータを分析した。これらの回答者の平均年齢は、6月時点で18.2歳、9月時点で18.5歳であった。

<調査票>

- 1) フェイスシート：回答者の性別、年齢、学籍番号を記入してもらった後、「本学に入学してから知り合った、最も親しい同性の友人」（〇〇さん、とする）を1人だけ思い浮かべるように教示した。そして、その友人のイニシャルを記入してもらった。
- 2) 友人関係ルールの順守度：調査1の友人関係ルール70項目から、重要度の高い順に25項目を選択し、自己のルール順守をたずねる項目を作成した。例えば、「〇〇さんから借りたお金は必ず返す」「〇〇さんと約束したことは必ず守る」「〇〇さんにうそをつかない」などである。そして、「いつもそうだ＝5」～「そうでない＝1」の5段階評定を求めた。同様に、友人（〇〇さん）のルール順守をたずねる項目も25項目作成した。例えば、「私から借りたお金は必ず返す」「私と約束したことは必ず守る」「私にうそをつかない」などである。
- 3) 対人認知尺度：廣岡・山中（1997）が用いた対人認知尺度（20項目、7段階評定）を用いた。項目を表2に示す。尺度の両極を「非常に＝1か7」とし、中点を「どちらともいえない＝4」とした。

- 4) 対人魅力 (好意度) : 次の4項目を用いた。「あなたは、〇〇さんに好意を持っていますか」「あなたは、〇〇さんと相性が合っていると思いますか」「あなたは、〇〇さんと深く関わっていると思いますか」「あなたは、〇〇さんとこれからも付き合っていきたいと思いますか」(5段階評定)。

この他、相手と知り合った時期、日頃どのくらい会っているか、具体的な共有体験について回答を求めた。

結果と考察

1. 予備分析—対人認知尺度の因子分析

対人認知尺度20項目については、各形容詞対の肯定側が高得点になるように数値を変換した後、 $118 \times 2 = 236$ をサンプルとみなして因子分析(主因子法・バリマックス回転)を行った。その結果、3つの因子が抽出された(表2参照)。

表2 対人認知評定に関する因子分析結果

項 目	因子負荷量			共通性
	I	II	III	
12. 感じのわるい—感じのよい	.739	.212	.043	.593
5. 親しみやすい—親しみにくい	.637	.029	.218	.454
10. いじわるな—親切的な	.592	.418	.031	.526
14. 信頼できない—信頼できる	.590	.260	.273	.490
2. 暗い—明るい	.553	-.391	.298	.547
15. ユーモアのない—ユーモアのある	.520	.010	.244	.330
1. 心のひろい—心のせまい	.518	.126	.134	.302
16. すなおな—いじっぱりな	.417	.303	.065	.270
3. さっぱりした—しつこい	.301	.143	.288	.194
18. せっかちな—落ちついた	.176	.695	-.007	.514
13. ひかえめな—でしゃばりな	.088	.685	-.172	.506
19. 不誠実な—誠実な	.472	.572	.275	.626
9. まじめな—ふまじめな	.040	.529	.365	.415
17. 知的でない—知的な	.198	.491	.401	.441
7. がまん強い—あきっぽい	.144	.415	.321	.296
11. 積極的な—消極的な	.233	-.087	.684	.529
6. 無気力な—意欲的な	.085	.109	.622	.406
8. 自信のない—自信のある	.154	-.107	.594	.388
20. 意志が強い—意志が弱い	.162	.230	.531	.361
4. 責任感の強い—無責任な	.346	.303	.458	.421
平方和	3.31	2.72	2.58	
寄与率	16.6	13.6	12.9	

注：因子負荷量が±.400以上は、ゴチで示した。

第Ⅰ因子に高い因子負荷量を示した項目は、感じのわるいー感じのよい (Q12)、親しみやすいー親しみにくい (Q5)、いじわるなー親切的な (Q10)、信頼できないー信頼できる (Q14)、暗いー明るい (Q2)、ユーモアのないーユーモアのある (Q15) などであり、「個人的親しみやすさ」と解釈された。第Ⅱ因子に高い因子負荷量を示した項目は、せっかちなー落ち着いた (Q18)、ひかえめなーでしゃばりな (Q13)、不誠実なー誠実な (Q19)、まじめなーふまじめな (Q9)、知的でないー知的な (Q17) などであり、「社会的望ましさ」と解釈された。第Ⅲ因子に高い因子負荷量を示した項目は、積極的なー消極的な (Q11)、無気力なー意欲的な (Q6)、自信のないー自信のある (Q8)、意志が強いー意志が弱い (Q20)、責任感の強いー無責任な (Q4) などであり、「活動性 (力本性)」と解釈された。

以上の因子構造は、林 (1978) や廣岡・山中 (1997) の結果と一致するものである。この結果に基づき、「個人的親しみやすさ」は、Q12、Q5、Q10、Q14、Q2、Q15の6項目、「社会的望ましさ」は、Q18、Q13、Q19、Q9の4項目、「活動性」は、Q11、Q6、Q8、Q20の4項目、を用いて尺度構成を行った。

2. 友人関係ルールの順守と対人認知・好意度

分析に入る前に、学生たちが友人 (〇〇さん) と知り合った時期や、日頃の接触頻度を確認しておこう。学生たちに〇〇さんと知り合った時期を選択してもらったところ、「入学して1ヶ月以内」を選んだ者が、6月初旬の調査で105名 (89%)、9月中旬の調査で114名 (97%) であった。また、〇〇さんと日頃どのくらい会っているかを選択してもらったところ、「ほとんど毎日会っている」を選んだ者が、6月初旬の調査で102名 (86%)、9月中旬の調査で89名 (75%) であった。これらの結果は、学生が友人 (〇〇さん) とかなり頻繁に接触していたことを示している。

それでは、「友人関係ルールの順守」と「友人に対する認知 (印象)・好意度」の関連を検討しよう。友人関係ルールは、自分がルールを守っているか (自己のルール順守) と、〇〇さんがルールを守っているか (相手のルール順守) を区別して分析した。

まず、自己のルール順守と認知・好意度との関連を分析する。分析の方法は、6月調査と9月調査のルール順守得点 (25項目の単純加算) を算出し、それぞれの時点で、回答者を得点の上位・下位50%ずつに分割した。そして両者を組み合わせて、6月も9月もルール順守度が低かったLL群 ($n=41$)、6月は低かったが9月は高かったLH群 ($n=15$)、6月は高かったが9月は低かったHL群 ($n=12$)、6月も9月も高かったHH群 ($n=42$) の4つの群に分けた。

表3には、自己の「ルール順守の変化パターン」(4群) から見た「友人の印象・好意度」を示している。表4には、ルール (4群) ×時期 (6月・9月) の分散分析の結果を示している。ルール (群) の主効果が認められた場合には、下位検定 (Tukey法) も行った。その結果、友人に対する認知 (印象) に関して、「個人的親しみやすさ」で、群の主効果と交互作用が認められた。これは、HHがLLやHLよりも「親しみやすさ評定」が高いこと、LHで評定が上昇したのに対し、HLで低下したことを示している。「社会的望ましさ」も、群の主効果と交互作用が認められた。これは、LHがLLよりも「望ましさ評定」が高いこと、LHで評定が上昇したのに対し、HLで低下したことを示してい

る。「活動性」では、群の主効果のみ認められた。これは、LHがLLよりも「活動性評定」が高いことを示している。友人に対する「好意度」に関しては、群の主効果と交互作用が認められた。これは、好意度が、HH>HL、HH>LL、LH>LLであること、LHで好意度が上昇したのに対し、HLで低下したことを示している。

次に、友人（〇〇さん）のルール順守と認知・好意度との関連を分析する。群分けの方法は、自己のルール順守の場合と同様であり、6月も9月もルール順守度が低かったLL群（ $n=45$ ）、6月は低かったが9月は高かったLH群（ $n=14$ ）、6月は高かったが9月は低かったHL群（ $n=12$ ）、6月も9月も高かったHH群（ $n=43$ ）の4つの群に分けた。

表3 自己のルール順守と友人の印象・好意度（平均値）

ルール順守 (群)	親しみやすさ		望ましさ		活動性		好意度	
	6月	9月	6月	9月	6月	9月	6月	9月
LL ($n=41$)	34.4	34.1	19.0	18.5	19.4	18.8	15.6	15.4
LH ($n=15$)	35.3	37.3	20.6	22.5	21.2	22.1	16.7	18.2
HL ($n=12$)	36.5	32.3	19.5	18.4	20.4	17.5	17.9	14.8
HH ($n=42$)	38.7	39.0	20.4	20.9	21.1	20.6	17.9	18.3

表4 表3に基づく「ルール(群)×時期」の分散分析の結果

要 因	親しみやすさ		望ましさ		活動性		好意度	
	<i>F</i>	<i>p</i>	<i>F</i>	<i>p</i>	<i>F</i>	<i>p</i>	<i>F</i>	<i>p</i>
ルール(群)	11.99	<.001	3.97	<.05	3.35	<.05	19.73	<.001
時期	1.62	<i>n.s.</i>	0.48	<i>n.s.</i>	3.16	<.10	1.85	<i>n.s.</i>
群×時期	5.72	<.01	4.57	<.01	2.18	<.10	10.17	<.001

表5 友人のルール順守と友人の印象・好意度（平均値）

ルール順守 (群)	親しみやすさ		望ましさ		活動性		好意度	
	6月	9月	6月	9月	6月	9月	6月	9月
LL ($n=45$)	33.6	33.9	18.7	18.6	19.8	19.0	15.5	15.4
LH ($n=14$)	36.1	38.0	20.6	20.9	20.4	20.7	16.8	17.7
HL ($n=12$)	37.9	33.3	19.1	18.7	19.7	16.8	17.8	15.2
HH ($n=43$)	38.7	38.5	20.7	21.1	21.0	20.8	18.1	18.3

表6 表5に基づく「ルール(群)×時期」の分散分析の結果

要因	親しみやすさ		望ましさ		活動性		好意度	
	F	p	F	p	F	p	F	p
ルール(群)	13.48	<.001	4.03	<.01	2.65	<.10	23.36	<.001
時期	2.43	n.s.	0.03	n.s.	3.92	<.10	1.78	n.s.
群×時期	6.78	<.001	0.42	n.s.	1.75	n.s.	5.78	<.01

表5には、友人の「ルール順守の変化パターン」(4群)から見た「友人の印象・好意度」を示している。表6には、ルール(4群)×時期(6月・9月)の分散分析の結果を示している。その結果、友人に対する認知(印象)に関して、「個人的親しみやすさ」で、群の主効果と交互作用が認められた。これは、「親しみやすさ評定」が、HH>LL、LH>LLであること、LHで評定が上昇したのに対し、HLで低下したことを示している。「社会的望ましさ」は、群の主効果のみ認められた。これは、HHがLLよりも「望ましさ評定」が高いことを示している。「活動性」では、群と時期の主効果に傾向が見られた。友人に対する「好意度」に関しては、群の主効果と交互作用が認められた。これは、好意度が、HH>HL、HH>LL、LH>LLであること、LHで好意度が上昇したのに対し、HLで低下したことを示している。

以上の結果は、次の3つにまとめることができよう。すなわち、①友人関係ルール順守度が高い場合(HH)が、低い場合(LL)よりも、友人に対する印象が肯定的であり、好意度も高かった。②ルール順守度が高まると(LH)、友人の印象が肯定的になり、好意度も高まった。逆に、ルールの順守度が低まると(HL)、友人の印象も否定的になり、好意度も低まった。③LHとHLを比較すると、LHにおける印象や好意度の“上昇”よりも、HLにおける印象や好意度の“低下”のほうが大きかった。

総合考察

本研究では、友人関係ルールの順守度の変化に伴い、友人に対する認知や好意度も変化していくと予測し、2つの研究を行った。

研究1では、短期大学2年生女子に友人関係ルール70項目の重要度評定を求め、25項目の友人関係ルールを抽出した。研究2では、短期大学の新生女子を対象にして、入学後にできた友人との「ルール順守度」と「友人に対する認知・好意度」について、6月初旬と9月中旬の2回にわたって調査を実施した。その結果、表3と表5に示すように、友人関係ルールの順守度が高い場合(HH)が、低い場合(LL)よりも、友人に対する認知が肯定的であり、好意度も高かった。この結果は、相互作用要因である友人関係ルールの順守が、対人認知や好意度を規定していることを示している。

さて、本研究で得られた最も重要な結果は、ルール順守度が上昇するにつれて友人に対する認知が肯定的になり、好意度も高まること(LH)。逆に、ルール順守度が低下する

につれて認知が否定的になり、好意度も低まること（LH）であろう。これらの結果は、当初の予測を支持するとともに、対人魅力研究の知見である「獲得－損失効果」（Aronson & Linder, 1965）として解釈できよう。すなわち、ルール順守度の上昇は、相手からの好意の獲得を意味し、それまでの否定的感情を解消すると同時に心理的報酬となる。逆に、ルール順守度の低下は、好意の損失を意味し、それまでの肯定的感情を打ち消すため、心理的な罰となる。そして、そうした報酬や罰を与えた相手に対する好意度が増減すると考えられるのである。

このように本研究は、友人同士の「ルール順守度の変化」と「認知・好意度の変化」との関連を明らかにしたが、それはどのような意味をもつのだろうか。というのは、“ルールを守るようになると、友人に対する見方や態度が肯定的になり、ルールを守らなくなると、友人に対する見方や態度が否定的になる”という結果は、きわめて常識的に思えるからである。しかしながら、結果を詳細に見ると、必ずしも常識的とは言えない3つの点を指摘できよう。

第1に、「ルール順守度の変化」が起きにくいことである。本研究では、6月と9月のルール順守得点から、回答者を上位・下位50%ずつに分割し、組み合わせで4つに群分けしたが、LH、HLに入る者は少なかった。したがって、日常の友人関係の中で、ルール順守度が大きく変化することは案外少ないのかもしれない。また、ルール（群）×時期の分散分析の結果、時期（6月・9月）の主効果が、ほとんど認められなかったことは、友人に対する印象や好意度も比較的安定していることを示している。

第2に、「ルール順守度」が、低→高に変化する場合（LH）と、高→低に変化する場合（HL）を比較すると、LHにおける印象や好意度の“上昇”よりも、HLにおける印象や好意度の“低下”のほうが大きかったことである。これは、「獲得－損失効果」のうち、現実の友人関係では、損失効果のほうが生起しやすいことを示唆している。つまり、友人関係ルールを守ることが、互いの印象や好意度の大幅アップにつながるわけではないが、ルールを守らなければ、印象や好意度が大きく低下してしまうという意味で注意が必要だろう。

第3に、「ルール順守度の変化」は、対人認知における「個人的親しみやすさ」の次元と対人魅力（好意度）に反映されやすかったという事実である。このことは、友人関係ルールの順守のいかんが、友人に対する評価的な側面よりも、感情的・行動的な側面に影響しやすいことを示唆している。

以上のように、本研究は、友人関係における対人認知や好意度の変化に関していくつかの知見をもたらしたが、今後検討すべき課題も残されている。その一つは、友人関係ルールの順守度の変化が、上昇にせよ低下にせよ、なぜ起きるのが明らかにされていない点である。今後の研究では、友人との間に起きた出来事（共有体験）など、ルール順守に変化をもたらす契機についても検討を加えていく必要があるだろう。

引用文献

- Argyle, M., & Henderson, M. 1984 The rules of friendship. *Journal of Social and Personal Relationships*, 1, 211-237.
- Argyle, M., & Henderson, M. 1985 *The anatomy of relationships*. London: Heinemann.
(アーガイル, M. ヘンダーソン, M. 吉森護 (編訳) 1992 人間関係のルールとスキル 北大路書房)
- Argyle, M., Henderson, M., & Furnham, A. 1985 The rules of social relationships. *British Journal of Social Psychology*, 24, 125-139.
- Aronson, E., & Linder, D. 1965 Gain and loss of esteem as determinants of interpersonal attractiveness. *Journal of Experimental Social Psychology*, 1, 156-171.
- Berg, J. H. 1984 The development of friendship between roommates. *Journal of Personality and Social Psychology*, 46, 346-356.
- 藤田 文 1997 青年期における友人関係ルールの適用 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 35, 155-165.
- 畠山 寛 2001 現代大学生の友人関係のルールに関する研究 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 261.
- 畠山 寛 2003 青年期の友人関係のルールに関する研究—親友と友人に関して— 鳥取短期大学研究紀要, 48, 49-57.
- 林 文俊 1978 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 25, 41-56.
- 廣岡秀一・山中一英 1997 対人認知次元の構造的変化に関する縦断的研究 実験社会心理学研究, 37, 37-47.
- 山中一英 1994 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 実験社会心理学研究, 34, 105-115.

付 記

本研究は、筆者の指導の下に河室美奈子さんと首藤真澄さん（大分県立芸術文化短期大学平成13年卒業）が行った平成12年度卒業研究のデータを再分析し、まとめ直したものです。記して二人に感謝の意を表します。また、研究2の調査にご協力くださった藤田文准教授にお礼申し上げます。